

忍びの風

下巻

池波正太郎



忍びの風

下巻

池波正太郎

文藝春秋

忍びの風・下（新装版）

昭和六十三年三月十五日 第一刷

定価 千二百円

著者 池波正太郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三十二三
電話 東京 二六五局 一二一一

郵便番号 一〇二

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

万一落丁乱丁の場合は御取替え致します

忍びの風・下／目次

設楽原……………	五	凱旋……………	一五六
安土の城……………	一三	雲うごく……………	一六八
坂本の雪……………	三七	決意……………	一八六
奉公……………	四九	老の坂……………	二二五
信長馬揃……………	七四	本能寺……………	二三六
天正十年……………	九〇	二条の城……………	二五四
高遠攻め……………	一〇五	雨の声……………	二六二
天目山……………	一三三	黒い蝶……………	二七三

装釘
橋田二朗

忍びの風・下

設楽原

鳥居強右衛門が、処刑された翌日の五月十八日朝になって……。

織田・徳川の聯合軍が、姿をあらわした。

織田信長は、長篠城の西方、設楽原とよばれる小盆地へ出て、極楽寺山という小丘へ本陣を置いた。

徳川家康は、それより長篠寄りの高松山へ陣をかまえたようだ。

設楽原と長篠は、さしわたしにして、約一里半ほどであろうか。

これほどの近間に敵の大軍がせまったとなれば、武田勝頼も長篠城を攻めているわけにはゆかない。

強右衛門が、いのちを捨てて〈岡崎からの援軍到来〉を告げたため、城内の奥平勢は一度に氣力をもり返し、

「強右衛門の敵を打て!!」

とばかり、武田軍に攻め取られた弾正曲輪へ発砲したり、矢を射かけてきたりしはじめた。

設楽原
強右衛門が死んだ十七日の夜などは、濠をこえた奥平の

兵たちが、弾正曲輪へ奇襲をかけたたりしたものだ。

怒った武田勝頼が、一時は、

「今夜のうちに、城を取ってしまおう」

と、いい出したりしたが、こうなっては城兵の抵抗の強さが、おもしろい知られるばかりで、こちらの出血がひどいものになるばかりだし、城攻めに兵員を配置したのでは、背後から織田・徳川軍が襲いかかって来た場合、うごきとれなくなってしまう。

そこで勝頼は意を決し、長篠城の監視として、小山田昌行・高坂昌澄・室賀信俊の三将に二千の兵をあたえることにし、残る兵力を、西方から迫る敵軍に備えて配置することにした。

織田・徳川両軍は、合わせて四万に近い。

これに対して武田軍は二万に欠けている。

老臣の馬場信春などは、

「いまは兵を引き、いったん甲斐へ、もどったほうがよろしゅうござる」

と、武田勝頼に進言をした。

「いかにも……」

勝頼も、これを無下にしりぞけようとはおもわなかったが、

（山々にかこまれたこのあたりで、戦さをするとなれば、二倍の敵とても恐れるべきでない）

という気もちになってしまった。

敵の兵力の配備を見きわめた上で、こちらが集中的に打って出れば、敵は大軍だけに却ってうごきにくい。

いざ、戦鬪になれば、勝頼には、

「織田・徳川に負けてなろうか」

という自信が大きかった。

一説には……。

武田家の老臣・馬場信春が、

「このたびは、ぜひとも軍をおさめ、あらためて徳川を討つがよろしゅうござる」

と、主張してゆずらなかつたといわれている。

しかし、跡部大炊介おちいすけのような主戦重臣派が武田勝頼に味方をし、馬場・山県・内藤・原など、故信玄以来の老臣たちの慎重さを、しりぞけてしまふかたちとなつた。

馬場信春は、

「もし、織田・徳川の大军を相手に、どうあつても戦うというのならば、先ず、長篠の城を攻め取つてしまつたほうがよい。それなら、敵にうしろを見せて引きあげる汚名もこうむらず、われらの武名も傷つくまい」

といい、どうにかして勝頼を、決戦へふみ切らせぬように、説きふせようとした。

しかし、いずれにせよ、敵の大军は眼前にせまつているのである。

「長篠城を攻めているうしろから、押し寄せて来たら、結局は決戦にもちこまれる」

のであつて、

「それならば、むしろ、こちらから出て行き、戦つたほうがよい」

と、軍議は決定した。

「半どの、どうおもう？」

於蝶おちうが半四郎に問うた。

「さて……忍びの戦きと大將が軍勢をひきいて戦うのとは、まったくちがう。おれには、わからぬな」

「半どの、武田方に勝たせたくはないのかえ？」

「む……それは、勝たせたい」

仕方なくこたへはしたが、いまの半四郎は、鳥居強右衛門が一命を捨ててはたらいしたこと、むだではなかつたことをよろこぶ氣もちで、いっばいなのである。

武田方の忍びも、いそがしくなつた。

織田・徳川の忍びたちも、四方に散つて、こちらの動勢をさぐっているにちがひなかつた。

こちらと同じように、さぐりをかけねばならぬ。

忍びどうしの闘いも激しくなるにちがひなかつた。

半四郎も於蝶も島の道半みちはんも、それから武田軍のだれもが、織田信長が三千もの鉄砲を備えていようとは、考えていなかった。

また、そのことを知つていたとしても、武田勝頼は「決戦」をおもひとどまろうとはしなかつたにちがひない。

敵と味方が開戦のときに、ひとしきり鉄砲を撃ち合い、

それからすぐに白兵戦となる。これが当時の戦闘の常識であった。

当時の鉄砲は連発がきかぬ火縄銃で、一度撃ってから、次の弾を撃つまでの仕度が、なかなか手間どる。射程距離も短い。

設楽原の北方は、木曾山脈につづく山また山であって、その山の尾がいくつにも別れて平地へ伸び、小さな丘陵をつくっている。

織田信長が本陣を置いた極楽寺山も、徳川家康の本陣・高松山もこうした丘陵の一なのである。

織田軍三万、徳川軍八千。合せて四万に近い軍勢が、すこしずつ設楽原へ進出し、周囲の武田軍を警戒しながら、陣地を構築した。

織田信長は、このとき、「武田軍を根切にする」と、いいはなっている。

根切とは、全滅させることだ。

信長はこれまで、同盟中の家康を応援に行こうとして、そのたびに近江や京都から目をはなせず、いつも家康に苦い汁をのませつつけてきた。

天下統一を眼前にひかえていながら、背後にせまって来る武田の強兵に、

(これ以上、おびやかされてはたまらぬ)のである。

それだけに信長の闘志は、すさまじく燃えあがっていた。徳川家康の本陣は、最前線といってよい。

それより半里(二キロ)うしろに織田信長の本陣がある。設楽原へ着くや、信長はすぐさま、家康の本陣の前面に、武田の騎馬隊の突撃をふせぐための、柵を構えさせた。

そして、その北側に、織田軍の部将・滝川一益、丹羽長秀、羽柴秀吉の軍勢を配置した。

これらの陣所の前面にも、馬塞ぎの柵を張りめぐらした。この柵に使用する木材は、すでに岡崎で切り組ませたものを用意して来たのだ。そのために岡崎出發が遅れたのである。

馬塞ぎの柵を、陣地の前に張りめぐらすことは信長が考案したものであって、これは信長が、武田の騎馬隊の猛烈な突撃を、いかに重視していたかがわかる。

馬塞ぎの柵は、二十余町ほども二重三重に張りめぐらせられ、しかもその間に乾堀(かわほり)を掘り、土居まで築いてしまった。

織田信長は、岐阜の本城を出発するにさいして、「兵ひとりごとに、柵木一本、縄一把をたずさえて出陣せよ」と、命を下している。

長さは約六尺。直径三寸余の木材を兵一人ずつに用意させたので、合わせて三万に近い柵木が、出陣と同時に得られたわけだ。

信長も、よくよく考えたものである。

武田勝頼は、長篠城の押えとして二千を残し、さらに、長篠城の東方にそびえる鳶ノ巣山の砦にも、二千の兵を置いた。

そして、みずからは約一万五千の兵をひきいて、決戦のぞんだのである。

兵を十三段に分けた勝頼は、寒狭川を越え、設楽原の敵軍を目ざしてすすんだ。

そして、二十一日の朝になると、徳川家康の本陣の東面約一キロメートルのところの小丘陵に〈本陣〉を置いたのであった。

こうなつては、双方の〈忍びの者〉も、それらしい活動をしめすことができなくなる。

両軍ともに迫り合い、たがいに軍容をさらけ出して、にらみ合っているのだから、忍びばたらきも必要ではないともいえよう。

これより先……。

すなわち前日の二十日に、織田信長は徳川方の重臣・酒井忠次をまねき、

「武田勢は、こなたへ押し進んでまいる。そこで、われらは南から山をまわつて、鳶ノ巣山の砦をうばい取つてしまいたい。どうじゃ？」

と、もちかけた。

むろん、それが成功するなら、効果は大きい。

つまり、敵の後方にある敵の拠点を攻め取つてしまえば、

敵は退路をふさがれたかたちにもなるし、こちらが敵を包囲したかたちにもなる。

敵の心理的な動揺も、

「大きい」

と、信長は見たのであった。

酒井忠次は、ひとまず陣所へ帰り、このことを主人の家康に告げると、

「織田殿の申されること、もつともである」

家康も同意をした。

家康としては、自分の領国の内で戦うのであるから、最前線で奮闘しなくてはならぬし、このさい信長のいうことにはさからえぬ立場にある。

それは別にして、家康は信長のおもいきった応援を得ての決戦であつたから、

「今度こそは……」

闘志を燃やしていた。

三方ヶ原以来、武田軍の来攻に対し、齒を喰いしばつて我慢を重ねてきただけに、作戦にも意欲的であつた。

「では、それがしがまいる」

といい、酒井忠次は二千余をひきいて鳶ノ巣山を攻めることになった。

信長は鉄砲五百挺をあたえ、これに自軍を割いてあたえた。

酒井部隊は、豊川をわたつて山間へ入り、吉川の観音堂

のあたりで馬を捨て、徒歩で鳶ノ巣山へ向った。

南からまわって来る、この敵のうごきに、武田軍はすこしも気づいていなかった。

のちに……。

さすがの於蝶も、

「あのとき、あのようなまねを信長や家康がしようとは、おもうても見なかった」

と、告白している。

そのとき、井笠半四郎は笑って、

「おれがいうたのは、そのことだ。そこが、忍びの戦さとはちがうところなのだ」

と、こたえた。

夜の闇の中を、酒井部隊は、ほとんど松明もつけずにすんだ。

非常に困難な行軍であつたらしい。

酒井忠次は、このあたりの地理に詳しい豊田藤助・近藤秀用ひでともの二人に案内をさせ、二人は木に縄を張って山路の目じるしとし、後からつづく部隊をみちびいたという。

こうして……。

二十一日の朝に、酒井部隊は鳶ノ巣山へのぼり、いっせいに戦旗をかかげ、

「うわあ……」

すさまじい鬨の声をあげて攻めかかった。

この鳶ノ巣山の攻防は、激烈をきわめたもので、皆は三

度うばい取り、うばい返された。

あの、大久保彦左衛門が講談などで自慢にした「鳶ノ巣山の戦い」は、このときの戦鬨なのである。

そして、ついに武田勢は破れて敗走することになるのだ。が……。

酒井部隊が攻撃を仕かけた少し前に、設楽原では武田と織田・徳川両軍の戦端が切つて落されていた。

両軍が、この決戦に投入した兵力は、戦記・史書によっていろいろにちがう。

いずれにしても、両軍の全兵力ではない。

両軍とも、それぞれに兵を分けているし、実際に設楽原で戦つたのは、織田・徳川軍が二万余。武田軍が一万ほどではなかつたろうか。

攻撃は、武田軍から仕かけられた。

武田の将・山県昌景がひきいる部隊が、押し太鼓を打ち鳴らし、徳川軍の陣地へ攻めかけて行つたのだが、張りめぐらされた柵に近づくと、徳川方は大量の鉄砲を撃ちかけてきた。

山県部隊は、徳川方の鉄砲の量が多いのに、目をみはつた。

連発ができなくとも、三段構えになつた鉄砲隊が、交替で撃つので、連発に近いものとなるわけであつた。ばたばたと兵が倒れる。

それにも屈せずに、山県昌景は第一の柵を突破した。

これで、いよいよ、白兵戦に移れるとおもったのだが、
そうはゆかない。

第二の柵が張りめぐらされていて、その間に濠が掘って
ある。

「それ、押し進め」

と、しゃにむに進む横合いから、敵の槍足輕が、喚声を
あげて迎え撃った。

「なんの!!」

こちらも猛然と闘うのだが、なにしろ、あたりいちめん
に穴が掘りめぐらされているのだから、闘いにくいことお
びたらしいのだ。

それでも、敵の足輕隊をしりぞけ、第二の柵へ接近する
や、

「待っていたぞ」

とばかり、すでに、第二の柵内へ入っていた鉄砲隊が、
いっせいに射撃をした。

武田勢が、おもしろいように倒れる。

「敵に、これほどの用意をしてあろうとは……」
すこしも気づかなかった。

このままでいては、全滅するよりほかはない。

ついに、山県昌景は部隊に退却を命じた。

山県部隊につづいて突撃して来たのは、武田信廉のぶひらの部隊
である。

山県昌景が、敵陣の様子を知らせる間もなく、武田部隊

が突進した。

これは、家康の本陣へ向って攻めかけたのだが、結果は
同じである。

これも退却する。

三番手は、いよいよ武田の騎馬隊が出撃した。

つづいて四番手の武田信豊が「黒武者」とよばれる勇猛
な騎馬隊をひきい、猛進する。

これに対して、織田信長は三千挺の鉄砲を徹底的につか
い、戦闘員は、ほとんど足輕だけですませたという。

それほどに、鉄砲と柵と濠との合体作戦が、効果をあげ
たことになるわけだ。

とにかく、あれほどに強い武田軍が、馬もろとも、おも
しろいように倒れる。

柵の手前まで突進して来るのを鉄砲で倒す。ひるんで、
いったん引き退く武田軍へ、足輕隊が長槍をなぐりつける
ようにして迎え撃つ。

体制を立て直した武田軍が、ふたたび攻めかけると、足
輕部隊は柵の内へ引きこんでしまう。

「それ、いまこそ」

と、武田軍が再び柵へ近づく。

すると、この間に弾丸をこめておいた鉄砲隊があらわれ、
二段、三段に交替して撃ちまくるのである。

鉄砲の数量が多かったことは事実だが、これを有効に使
いきった織田信長の作戦と用兵が、これまでの戦場には見

られなかった「新しき」をそなえていたことに注目すべきである。

鉄砲と柵と壕……。

この三つに、勇猛をほこる武田軍が、完全に打ちのめされた。

於蝶と半四郎と道半は、雁峰峠の峰つづきの山から戦場を見下し、声もなかった。

「これは、どうしたことじゃ？」

於蝶が、たまりかねて、

「あれほどの鉄砲が、あったとは……」

「うむ。姉川のときや、小谷攻めのときとは、まったく違う。戦さの仕方がちがう」

と、半四郎も興奮をおさえきれぬ様子だ。

それでも尚、武田軍は執拗に攻撃をくり返している。

くり返すたびに、兵力が減ってゆくのが、目に見えてわかる。

織田信長は、昼前に極楽寺山の本陣を、徳川家康の本陣へ移し、合流した。

これは、何を意味するか……。

「家康が突きくずされたら、おれが食いとめよう」という、その必要がなくなったからだ。

最前線突き破られる心配がなくなったからだ。

足輕隊を出しては敵をおびきよせ、これを鉄砲で撃ちまくる。このくり返しなのだ。

それをまた武田軍は、飽くことなく、くり返しては退却して行くのである。

「いつかは、柵も破れる」

とおもい、

「鉄砲だとて、いつまでつづくものではない」

と考え、

「われらの強兵が負けるはずはない」

と、自信をかきたて、そのたびに突撃し、そのたびに退却する武田軍なのであった。

そして、武田軍は、山県昌景・内藤昌豊・土屋昌統などの重臣や、武田信虎・信玄・勝頼の三代につかえた老臣である馬場信春までも、この戦場で戦死させてしまった。

戦闘は、未の刻（午後二時）ごろに終わった。

武田勝頼は、あまりにも無惨な敗北が「信じられぬ」といった顔つきで、むしろ茫然と、鳳来寺の方向へ退却して行ったのである。

戦記によると……。

設楽原の決戦が開始されようとしたとき、武田家の重臣・山県昌景は、武田勝頼の本陣へ使番を走らせ、

「敵の攻めかけて来るまで、お待ちなされ。こなたから攻めかけては不利でござる」

と、進言をした。

すると勝頼は、鼻で笑って、

「いくつになっても、いのちは惜しいと見える」

こう、つぶやき、

「進撃せよ」

の命令を下した。

これをきいた山県昌景は激怒し、

「それならば、わしの死様を、見せてくれる。みな、討死じゃ」

と叫び、出撃し、戦死をとげた。

このように、老臣・重臣たちと武田勝頼とは事ごとに意見が合わず、老臣たちは亡き信玄の偉大さをしのんでたのします。勝頼はまた、若い自分のいうことをこころよくきかぬ老臣たちとなじまず、その結果が設楽原の大敗北をまねいた、というのである。

山県のみではない。

馬場信春も内藤昌豊も、

「このような主人につかえていても、もはやむだじゃ。武田家がほろびるのは目に見えている。われらはいさぎよくこの戦場で死のう」

といい、無謀きわまる突撃をあえて敢行し、戦死をとげたというのだ。

それが、どこまで事実であったか……。

いずれにせよ、信玄亡きのちの武田家が、それに近い内紛があつたろうことは推察できる。

勝頼も豪勇の大將ではあるけれども、亡き父・信玄にくらべられたのでは、たまったものではあるまい。

設楽原の決戦を見ても、武田家に名高い老臣たちが狂気のごとく突撃をくり返しているのは、いささか異常にもおもえる。

武田軍は、織田・徳川軍の鉄砲があまりにも大量であつたことに、気づかぬわけではない。

だが、それにしても、これだけ鉄砲をうまく使い、息をつく間もない武田軍の突撃を次から次へ、あざやかにさばいて、これを打ち叩き追い退けようとは、武田軍も考えおよばぬことであつたろう。

武田方の〈忍び〉たちも、これには瞠目していた。

それだけに、

「くやしい、くやしゅうてならぬ」

於蝶は、歯がみをした。

彼方の織田信長への怒りと復讐の執念は、尚も激しく強くなつていったようである。

安土の城

天正九年（西暦一五八一）の年が明けた。

長篠の戦争がおこなわれてより、六年の歳月がすぎ去ったことになる。

そして、姉川の戦争から十一年を経ていた。

（早い。姉川ときには、まだ二十の半ばをこえたばかりのおれだったのに……）

井笠半四郎は、夢のような十年が、あまりにも呆気なく過ぎてしまったようなおもいがしている。

半四郎は、三十七歳の新年を近江の国の坂本で迎えた。

（於蝶どのも……そうだ、ちょうど四十、か……）

であった。

二年前に別れたきり、半四郎は於蝶に会っていない。

三年前の夏。

於蝶は、甲賀・杉谷の隠れ家について、

「いつまでも、ここを根城にしていたところで、どうにもならぬ」

といい出し、島の道半と、その次男・十蔵を、先ず、近

江の坂本へさし向けることにした。

坂本は、比叡山ひゑさんの東ふもとの町で、琵琶湖にのぞむ要衝の地だ。

この山岳は、京都と近江の境界をなしていると同時に、山全体が延暦寺そのものであり、天台宗の総本山である比叡山・延暦寺は、一向宗の本山・本願寺とならんで日本仏教界の二大勢力であった。

本願寺が、日本全国にひろがっている寺々や僧兵、信者を指揮し、兵隊も抱えて織田信長へ反抗したのと同様に、延暦寺も、

「狂人のごとき信長に、天下をまかせてはおけぬ」

と起ちあがり、これも僧兵を動員して、信長の進出を阻とどんだ。

浅井長政と朝倉義景が同盟して信長と戦ったときには、延暦寺がこれを助け、ことごとく邪魔をするので、

「寺や坊主どもが仏の教えをひろめるのは勝手だが、われらの戦さにくちばしを入れてはならぬ」

と、織田信長は何度も延暦寺へ申し入れたが、きこうともせぬ。

そこで信長は、

「もはや、がまんがならぬ。比叡山を焼きはらえ」

断を下した。

そして、上坂本から火をつけて攻撃をかけ、比叡山にある寺という寺を、ことごとく焼きはらってしまった。

さらに、延暦寺の僧をふくめ、男女合せて千六百人もの人たちを殺し、仏像も経文も、灰にしてしまったものだ。

以後、十年を経て尚、延暦寺は荒廢から起ちあがれぬ。

その延暦寺の近江側のふもとの坂本に、半四郎は島の道半と暮しているのである。

とにかく比叡山の焼打ちは、世の人びとに非常なショックをあたえたものだ。

むかしから、天皇と皇都をまもる寺として尊ばれていた延暦寺を、一夜のうちに、織田信長は灰にしてしまった。

「天下をわがものとするためには、どのようなことも仕てのけてくれよう」

と、信長は決意している。

だが、これほどにおもいきったことを仕てのけた戦国大名は、信長ひとりであった。

もとより信長には、仏教を信ずるころはない。

はるばると海をわたって日本へ来たキリスト教の宣教師たちを招き、信長はよろこんで、はなしをきく。それも信仰をするからではなく、外国の文明に好奇の情熱をかたむけているにすぎぬ。

信長が信ずるものは、

「われ一人」

であった。

「われ一人」が進む、その日その日の現実のみを信じているといつてよい。

日本の文化や伝統や皇室や、政治にも深くむすびついていた仏教界の反撃も、信長のすさまじい決断の前には、崩れ去るよりほかに道はなかった。

それにしても……

延暦寺といい本願寺といい、日本全国に信徒を抱えているものだから、これには信長のみならず、他の戦国大名も悩まされつづけてきたのである。

信長も、つくづくと手を焼いた。

その結果、比叡山焼打ちにふみ切ったわけだが、後年、延暦寺のほうでも、

「われわれが僧兵などを抱え、みずから戦火の中へ割って入ったりしたことは、よくないことであつた」

などと、反省しているところを見ると、織田信長のおこなつた事実を、いちがいに残酷なもの、いいきつてしまふわけにもゆくまい。

ところで、信長は、比叡山の勢力を潰滅してのち、重臣・明智光秀を坂本の城主に任命をした。

それまで、坂本に城はなかった。

坂本は、比叡山・延暦寺の門前町として発展してきたところであつた。

比叡山が焼きはらわれてから、坂本の町も必然、さびれてしまった。

それがいま、明智日向守光秀の城下町として、にぎわいはじめている。